『祈りについて』における神と知性
ー初期アリストテレス対話篇再構成の問題ー

赤 井 清 晃

小論は、初期アリストテレスの思想についての研究のうち、特に初期アリストテレスにおいて「神」または「神性(神的なもの)」とは何であるか？という問題について、一連の断片資料を個別に検討する論攷のひとつとして、対話篇『祈りについて』を取り上げる。

初期アリストテレスの対話篇『祈りについて』は、シンプリキオスの『天体論』註解による短い一断片しか伝わっていない。しかしながら、この一篇は、初期アリストテレスにおいて「神」または「神性(神的なもの)」とは何であるか？という問題をめぐって、アリストテレスの思想内容を解明するために重要な資料のひとつである。

この一篇については、古くは、ローゼ(Rose, V., *De Aristotelis Librorum Ordine et Auctoritate Commentatio*, Berolini, 1854, p.108)、ベルナイス(Bernays, J., *Die Dialoge des Aristoteles in ihrem Verhaeltnis zu seinem uebrigen Werken*, Berlin, SS.122-3)らの言及があるが、特に、アリストテレスの他の対話篇、著作との関係で注目すべきは、やはり、イェーガー(Jaeger, W., *Aristoteles. Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923(1955), SS.162-166, 251-254)であろう。

この一篇を読み解くために、解決しなければならない問題はいくつもある。歴史的に、新プラトン派ーキリスト教神学の思想傾向から切り離して、アリストテレスの思想内容そのものを取り出すことが可能であるか。『形而上学』に代表される、後のアリストテレスの「神学ー存在論(Theologia -

Ontologia)」の観点と、初期アリストテレスの「神」概念はいかなる関係にあるのか。さらに、アリストテレスの思想を発展史的に捉えることができるか、また、特に「神」の概念については、心理学的(psychologisch)な由来から説明することをどう評価するか。

以上は、初期アリストテレスの思想とコルプス(著作集)のアリストテレスの思想全体にわたる大きな問題であるが、小論では、『祈りについて』の断片資料において言及される「神」と「知性」について、両者の関係とそれぞれの内実をどこまで確定できるのかを、同じく、初期の対話篇『哲学について』の資料として、キケロによる資料として一般に採用されている、断片26(Ross)と比較することによって考察を進めることにする。

まず、シンプリキオスの『天体論』註解によって伝えられる、当該の断片は次の通りである。

> ὅτι γὰρ ἐννοεῖ τι καὶ ὑπὲρ τὸν νοῦν καὶ τὴν οὐσίαν ὁ Ἀριστοτέλης, δῆλός ἐστι πρὸς τοῖς πέρασι τοῦ περὶ εὐχῆς βιβλίου σαφῶς εἰπὼν ὅτι ὁ θεὸς ἢ νοῦς ἐστὶν ἢ ἐπέκεινά τι τοῦ νοῦ.
>
> (Simplicius, in *De Caelo*, 485. 19-22)

> というのは、アリストテレスは、知性と実有を超える、何らかのものを考えていることは、『祈りについて』という著作の最後の箇所で、「神は知性であるか、或いは、知性を超える何らかのものである」と明確に述べていることからして、明らかである。
>
> (シンプリキオス『天体論』註解)

ここから、次のことが確認されるであろう。シンプリキオスが伝える、アリストテレス自身のものと想定される文言は、「神は知性であるか、或いは、知性を超える何らかのものである」であり、それに先立って、シンプリキオ

スの「アリストテレスは、知性と実有を超える、何らかのものを考えている」というコメントがある。従って、アリストテレスによれば、（A）「神は知性である」か、或いは、（B）「知性を超える何らかのものである」という2つの可能性があるが、2つのうち、どちらかの可能性を強調する、というものではなくて、（A）と（B）は、対等の可能性をもつ選択肢として、「ἢ（或いは）」で結び付けられているだけである。しかし、これに先立つシンプリキオスのコメントの語調は、はじめから、「（アリストテレスは、神として）知性と実有を超える、何らかのものを考えている」と言っているように思われるが、そうであれば、これは明らかに、一つの解釈であり、アリストテレス自身の文言のうち、（B）の可能性を強調している、と考えられる。

さらに、ここで言われる「神（θεὸς）」とは何か、「知性（νοῦς）」とは何か、というより根本的な問題があるが、「神」のほうは、それ自体が問題として探究されいるので、ここでは一旦、おくとしても、「知性」については、後期の、或いは、コルプス（著作集）のアリストテレスにおける「知性」のどの局面に相当するのか、ということが明らかではない。すなわち、いずれにしても「神的なもの」であるには違いないが、「人間のなかで、これのみが神的なもの」と言われるようなレベルでの「知性」であるのか（『デ・アニマ』）、或いは、完全現実態としての「思惟の思惟」（『形而上学』第12巻）であるような、まさに、「神」そのものとしての「知性」であるか、ということである。

さて、ここでいきなり、後期の、或いは、コルプス（著作集）のアリストテレスに戻らずに、同じく、「神」または「神性（神的なもの）」とは何であるか？という問題についての資料となる（ただし、混乱した内容の）、初期の対話篇と目される『哲学について』の資料として、キケロによる資料として一般に採用されている、断片26（Ross）の場合を見てみよう（テクストについては、小論末尾の資料を参照）。この断片では、エピクロス派のある人物が、アリストテレスの（哲学的）神学がまったく混乱しているといってアリスト

テレスを非難していることを、キケロが報告している形になっているのであるが、我々の問題に関しては、次の点が注目される。

アリストテレスの（哲学的）神学に混乱が生じる原因は、アリストテレスが、「神」または「神性（神的なもの）」に関して、次の4つの仕方で語っていることである。テクストによれば、アリストテレスは、「神（deus）」または「神性（divinitas、神的なもの）」を次のものと関係付けて用いている。

（a）精神（心）
（b）世界（宇宙）
（c）その他の物体
（d）天（天界）の物質（もの）

キケロのテクストでは、それぞれ、以下のようになる。

(a) modo enim menti tribuit omnem divinitatem
(b) modo mundum ipsum deum dicit esse
(c) modo alium quendam praeficit mundo eique eas partes tribuit ut replicatione quadam mundi motum regat atque tueatur.
(d) tum caeli ardorem deum dicit esse

これら4つに関しても、従来の解釈は一致を見ていないが、その主なものは、以下の通りである。

まず、イェーガーによれば、『哲学について』は、アリストテレスがプラトンとは根本的に異なる哲学的見解を表明し始めた著作であり、「神とは、世界がそれに従属している超越的な不動の動者である。神は、世界をその目的因として導くが、それは、神の純粋な思惟によってである。これが、アリストテレスの形而上学の新しい核である」（Jaeger, Engl. Transl., p.139.）。ボスによれば、「それゆえ、Jaegerは（キケロのテクストの）alius quidamをmens

と同一視する」(Bos, p.186. n.7.)。なお、このエピクロス派の人物(＝ウェルレイウス)が、アリストテレスも世界(宇宙)を神的であると言うのは、ある誤解に基づいているのであり、イェーガーによれば、アリストテレスがcosmosと言うとき、天(天体)を意味していたはずである(Jaeger, Engl. Transl., p.139.)、ということになるが、mundus, caelumとアリストテレスの用いていたはずのギリシア語との対応関係がかならずしも明らかではない、と言わなければならず、後に、エッフェは、この点でイェーガーを批判している(Effe, S. 159, n.10.)。しかし、イェーガーの解釈に対する、より一般的な批判は、この時点でのアリストテレスは、イェーガーが言うような「超越的な不動の動者」という考えに至っていないということである(H.von Arnim, W.K.C.Guthrieなど)。

また、Berti(Berti, pp.375-392.)は、当該のキケロのテクストにおけるウェルレイウスの前述の4つの「神」または「神性(神的なもの)」の規定を検討して、矛盾するものを排除するか、矛盾する意味を排除することによって、矛盾する点をアリストテレスの主張とは認めないことによって整合性をもたせようとしている。そして、(a)と(b)は基本的にこれを認める。問題は(c)と(d)であるが、(c)に関しては、alius quidamを(a)のdeus-mensとしての不動の動者と看做し、その一方で、可視的な世界(宇宙)としてのmundusを認めて、このmundusも、(b)で言われる全体としてのmundusの一側面であるとする(Berti, pp.378-379; p.383.)ことによって整合的に理解しようとしている。また、(d)に関しては、「神性(神的なもの)」の2つの概念(Berti, p.383. due concetti del divinoすなわち、il Dio supremo trascendente il mondoとil Dio cosmico(＝il mondo stesso).)を認めることによって、その一方がcaeli ardorという言い方で言及されている、としている。

最後に、ボス(Bos, pp.190-200.)が解釈上、問題としているのは、『哲学について』でのアリストテレスに、コルプスにあるような形而上学的神学がすでにあったのか、それとも、この時点でのアリストテレスの「神」は、超越的ではなく、(宇宙)内在的であるという意味で、内在的・宇宙論的神学で

あったのか、という点である。結局のところ、ボスは、「神」にある意味で超越的側面と内在的側面を認めている。彼は、アルニムとそれに従った人達が、イェーガーを批判する際に、イェーガーがalius quidamを、直ちに、不動の動者と同一視した点を衝いているのは正しいが、かといって、内在的・宇宙論的神学を『哲学について』に認める、ということにもならないと言っている。つまり、イェーガーほど極端ではないが、何らかの形而上学的神学を認める余地があるということになるだろう。

当該のテクストの解釈としては、まずalius quidamを、Nous（知性的存在）と看做す。しかし、これには次のような前提がある。それは、「神的存在が世界（宇宙）を支配する」という場面に先立って、一般に「何かが何かを支配する」というとき、その「支配する」という活動は、アリストテレスにおいては、「観想的領域」とは明確に区別された「実践的領域」に属する。ところが、プラトンにおいては、いわゆる「哲人統治者（哲人＝統治者）」の理想に示されるように、「実践的領域」と「観想的領域」とは結びついていなければならなかった。アリストテレスにあっては、『哲学について』においても、これら2つの領域は、区別された「2つの神的実在」（Bos, pp.192.）に帰せられる、と言う。その一方が、Nous（知性的存在）と言われ、もう一方が、alius quidamと言われる（が、これらは、同じ「神的実在」の2つの側面であるから、これらがどの次元で区別されるかが問題であるが、この点に関しては、ボスは明確に述べていないように思われる）。

また、replicatio（循環運動）については、ボスは上述の区別された「2つの神的実在」の活動に対応して、世界（宇宙）の中でのいわば物理的運動と、Nous（知性的存在）のいわば知性的活動とに分け、その両方の可能性のうち、replicatioに後者、すなわち、Nous（知性的存在）の知性的活動（Bos, p.200.）の可能性があることを強調する。それは、物理的運動の生じる世界（宇宙）を超越したNous（知性的存在）としての「神的実在」による、一種の知性作用である、というのだが、これに対しても、alius quidamの解釈に対するのと同様に、その依って立つ、区別された「2つの神的実在」の問題点を衝くことに

よって反論可能であると思われる。

以上、『哲学について』の断片26（Ross）の解釈上、問題の多い箇所を見たわけであるが、ここで指摘される問題点は、我々のテクスト、すなわち、『祈りについて』における神と知性についてもあてはまるのである。キケロが用いるmensという語と、シンプリキオスが用いるνοῦς という語の間の関係を検討する必要があるけれども、仮に、これらをほぼ同一の意味とすれば、『哲学について』の断片26（Ross）における、「神（deus）」または「神性（divinitas、神的なもの）」＝（a）精神（mens、心）は、『祈りについて』における神と知性の関係のうち、（A）「神は知性 νοῦς である」に相当する、と思われる。そして、この場合、精神（mens）、或いは、知性（νοῦς）が、宇宙論的であるか、それとも、超越的であるか、という問題がある（Laurenti, p.726）。宇宙論的精神、或いは、宇宙論的知性とは、宇宙（世界）内在的な何らかのもの、という意味であり、宇宙（世界）内在的ではない、すなわち、超越的であることに対して言われる。アリストテレスの場合、「神」または「神的なもの」について、この両方の可能性を想定することができるわけであるが、『祈りについて』における神と知性の関係のうち、（A）「神は知性 νοῦς である」の場合には、これをどちらに解することができるであろうか。もう一つの選択肢、すなわち、（B）「知性を超える何らかのものである」ということが言われていることを考慮すれば、宇宙（世界）内在的な何らかのもの、という意味での、宇宙論的精神、或いは、宇宙論的知性が想定されている、とも考えられる。そうすると、それは、例えば、具体的に、『哲学について』の断片26（Ross）における、（c）その他の物体、あるいは、（d）天（天界）の物質（もの）といったものを想定することになるかもしれない。もっとも、これは、『祈りについて』と『哲学について』の断片26（Ross）を整合的に読もうとする場合のことで、必ずしもその必要はない。それに、『祈りについて』における神と知性の関係について、（A）「神は知性 νοῦς である」と（B）「知性を超える何らかのものである」における「知性」の意味が、同一レベルで

考えられているのか、という問題がある。差し当たり、(B)を基準にして考えるならば、ここでの「知性」の意味は、前述の、宇宙(世界)内在的な何らかのもの、とするのが分かりやすい(つまり、さらにこれを超える、超越するのが容易である)のであるが、果たしてそうであろうか。『哲学について』の断片26(Ross)の場合、例えば、ベルティが行なったように「神的なもの」と言われる可視的な物体を比喩的に「神的なもの」と解するのが、一つの解決策である。そして、これは具体的には、天体を指すことになるであろう。しかし、その場合、「神」、或いは、「神的なもの」が唯一であるか、複数であるか、という問題が生じることになる。この点、『祈りについて』では、文法的に、単数でしか述べられていないので、複数の天体とすることは困難であろう。このことを強い根拠として、「神」の単数性(唯一性)に固執するならば、『祈りについて』では、宇宙(世界)内在的でありながら、唯一の「知性」というものを想定することになる。後世、アリストテレスを離れて、そのようなものを想定する者を容易に思い浮かべることができるが、『祈りについて』におけるアリストテレスが、想定していたものと、果たして同じであるのか、大いに問題が残る。ただ、チャーニスが、「『哲学について』の解釈はすべて、推測にならざるを得ない」(Cherniss, p.592.)と言ったけれども、『祈りについて』の場合は、残存資料が少なすぎて、「推測」すら困難である、と言わざるを得ないだろう。

文献

赤井清晃、「アリストテレス『哲学について』Fr.26における「神」の概念――キケロによる資料に基づいて――」、京都大学『古代哲学研究室紀要』8(1998)、pp.36-47.

Arnim, 'Die Entstehung der Gotteslehre des Aristoteles', in F.P.Hager, *Metaphysik und Theologie des Aristoteles*, Darmstadt, 1969, ss.1-74.

Bernays, J., *Die Dialoge des Aristoteles in ihrem Verhätnis zu seinem übrigen Werken*, Berlin, 1863.

Berti, E., *La filosofia del primo Aristotele*, Padova, 1962.

Bos, A.P., *Cosmic and Meta-Cosmic Theology in Aristotle's Lost Dialogues*, Leiden, 1989.

Cherniss, H., *Aristotle's Criticism of Plato and th Academy*, Baltimore, 1944 (repr., New York, 1962).

Dumoulin, B., *Recherches sur le premier Aristote (Eudème, de la Philosophie, Protreptique)*, Paris, 1981.

Gigon, O., *Aristotelis Opera* III, Berlin, 1987.

Jaeger, W., *Aristoteles. Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923 (1955). (Engl.Transl., Oxford, 1934, 1948[2])

Laurenti, R., Aristotele: I Frammenti dei Dialoghi, Traduzione introduzione e commento, Napoli, 1987. pp.693-740.

Rackham,H., Cicero: *De Natura Deorum, Academica*, Loeb Classical Library, 1933 (1956).

Rose,V., *De Aristotelis librorum ordine et auctore commentatio*, Berlin, 1854.

Rose,V., *Aristotelis qui ferebantur librorum fragmenta*, Leipzig, 1886.

Ross,W.D., *Aristotelis fragmenta selecta*, Oxford, 1955.

Untersteiner,M., *Aristotele:Della Filosofia: Introduzione, testo, traduzione e commento esegetico*, Roma, 1963.

Walzer,R., *Aristotelis dialogorum fragmenta*, Firenze, 1934.

資料：「哲学について」断片26 (Ross) は、以下のようになっている。

Aristotelesque in tertio de philosophia libro multa turbat a magistro suo Platone dissentiens. modo enim menti tribuit omnem divinitatem, modo mundum ipsum deum dicit esse, modo alium quendam praeficit mundo eique eas partes tribuit ut replicatione quadam mundi motum regat atque tueatur. tum caeli ardorem deum dicit esse, non intellegens caelum mundi esse partem, quem alio loco designarit deum. quo modo autem caeli divinus ille tot dii, si numeramus etiam caelum deum? cum autem sine corporeidem vult esse deum, omni illum sensu privat, etiam prudentia. quo porro modo mundus moveri carens corpore, aut modo semper se movens esse quietus et beatus potest?

アリストテレスも、その著「哲学について」の第3巻において、自分の師であるプラトンと見解を異にすることによって、多くの混乱を引き起こしている。実際、アリストテレスは、あるときは、すべての神性（divinitas）を精神（mens）に帰したり、あるときは、世界そのもの（mundus ipse）が神（deus）であるとしたり、またあ

るときは、他の何らかの神を世界の上に置いて、その神に、世界の運動を何らかの循環運動によって支配し、保持するという役割を帰しているからである。また、アリストテレスは、天の火(caeli ardor)が神であると言っているが、その際、他の箇所でアリストテレス自身が、神であるとした、その天が世界の部分であることを理解していない。しかし、その神的感覚(divinus sensus)は、いかにして、このように速い天の運動の中で保持され得るのだろうか？また、もし我々が、天をも神に数えるならば、あの多くの神々はどこにいることになるのだろうか？しかしまた、アリストテレスは、神は身体なしであるとしようとしているのだから、神からすべての感覚も、また思慮をも神から奪っているのである。そして更に、世界は身体を欠いて、どのようにして運動することが出来るのであろうか？或いは、世界は常に自らを動かしていながら、どのようにして平静であり至福であり得るのであろうか？

Deitas et ratio in libero *De Prece*

—ad restitutionem dialogorum Aristotelis Iunioris—

Kiyoaki AKAI

Hoc tractatu illustretur relatio inter deitatem et rationem in fragmento liberi *De Prece* quod Aristoteles Iunior scripsit; et investigatur quomodo Aristoteles tractaverit de conceptibus deitatis et rationis in dialogis. Deinde fertur comparatio huius fragmenti cum fragmento n.26 (Ross) quod attribuetur dialogo *De Philosophia* in quo ut divinitas perstringuntur mens, mundus, partes mundi et ardor caeli. Ex hac comparatione quidem emergit differentia subtilis tractationis Aristotelis de conceptibus deitatis (seu divinitatis) et rationis (seu mentis) in his fragmentis, sed non possumus hanc differentiam attribuere statim Aristoteli. Possibile enim est oriri ex Simplicio sive Cicerone.